

皇妃エリザベットの暗殺者
ルイジ・ルキーニ回顧録

Histoire D'un Enfant Abandonné
À La Fin Du XIX^e Siècle
Racontée Par Lui-Même



- ①**バリ**:1873年4月22日、ルキーニ誕生
- ②**ランテネ**:1874年9月30日まで里親のもとで養育
- ③**バルマ**:
2つの孤児院とモニチ家で幼少期を過ごす
- ④**ヴァラーノ・デ・メレガーリ**:
1882年にニカシ家に移る
- ⑤**ジェノヴァ**:1887年、ニカシ家を離れたルキーニがまず向かった先
- ⑥**ティチーノ州**:1889年からキアツソ、アイロロなどスイス南部の各地で働く
- ⑦**レマン湖周辺**:1892年にアルプス山脈を素足で超え、各地の建設現場などで働く
- ⑧**ウエティコン**:1893年、カサグランデ氏のもとで煉瓦職人として6カ月ほど働く
- ⑨**ウィーン**:1894年春に数日滞在
- ⑩**ブダペスト**:1894年7月10日に司法当局に出頭
- ⑪**トリエステ**:イタリア送還を求めイタリア領事館へ出頭
- ⑫**ナポリ**:1894年12月9日、モンフェラート第13騎兵連隊に入隊
- ⑬**パレルモ**:1897年12月15日に除隊後、ダラゴナ公の家で3カ月半従僕として働く
- ⑭**マルティニ**:ジェノヴァ、トリノを経由しサン・ベルナル峠を超えスイスへ
- ⑮**サルヴァン**:1898年、マッセラ親方のもとで左官として働く
- ⑯**ローザンヌ**:1898年5月20日に到着、無政府主義の集会に参加
- ⑰**ジュネーヴ**:アンリ・ドルレアン暗殺のため1898年9月5日に到着

ルキ二関連地図1

誕生から終焉の地までの足跡

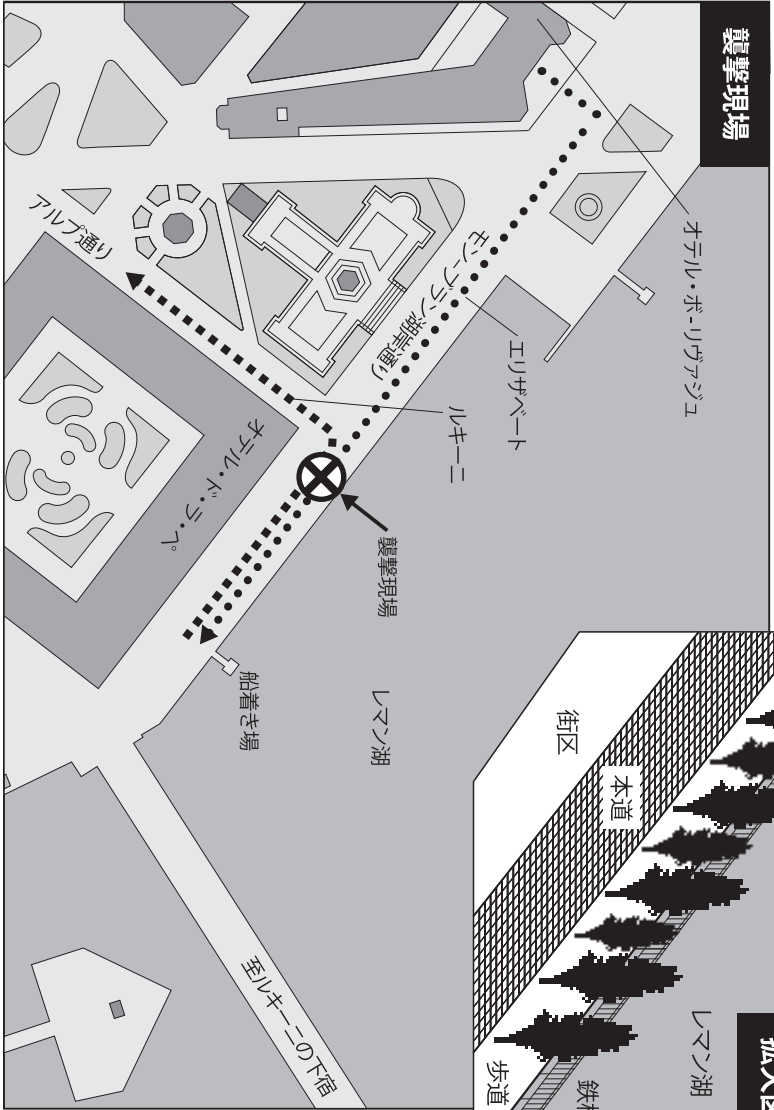


19世紀後半のヨーロッパ

ルキーニ関連地図2 ジユネーヴ周辺



- ⑱ アンフエル通り8番地:ルキーニが滞在していたセドウ夫人の下宿屋
- ⑲ アンダレ公園:ルキーニが立ち寄った公園
- ⑳ モソーラン湖岸通り:襲撃現場
- ㉑ サン・タンクトワヌ監獄:尋問中にルキーニが収容されていた監獄
- ㉒ パル・ド・ジュステナス:裁判所をはじめ司法当局が入っている建物
- ㉓ エヴェシユ監獄:終身刑を受けたルキーニが収容されていた監獄。ルキーニ終焉の地



襲撃現場

ホテル・ポルティナーノ

エリザベート

ルキーニ

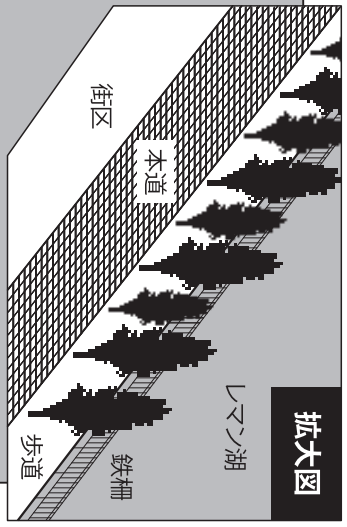
襲撃現場

レマン湖

船着き場

至ルキーニの下宿

アルプ通り



拡大図

レマン湖

街区

本道

鉄柵

歩道

装丁・本文デザイン 大森裕二
カバー写真 Cynet Photo



目
次

第1章 ルキーニ回顧録

3	ルキーニ関連地図
12	訳者による解説

22	読者へ
----	-----

32	序文——実の両親について知っていること——
----	-----------------------

45	第一部——少年時代の思い出——
----	-----------------

第2章 その後のルキーニ

132	遍歴
-----	----

135	兵役
-----	----

138	無政府主義の洗礼
-----	----------

143	標的
-----	----

第3章 暗殺事件

152	事件当日
-----	------

162	尋問
-----	----

162	九月一〇日の尋問
-----	----------

183	九月一日の尋問
-----	---------

訳者による解説

『ルキーニ回顧録』はルイジ・ルキーニ本人がジュネーヴの獄中で記した半生記である。ルキーニはオーストリア皇妃エリザベートを暗殺したイタリアの無政府主義者であり、エリザベートの生涯を描いたウィーン発のミュージカル『エリザベート』（脚本・作詞ミヒャエル・クンツェ、作曲シルヴェスター・リーヴァイ）にも狂言回しとして登場する。

ミュージカル『エリザベート』は、死者の世界で裁判を受けるルキーニへの「なぜエリザベートを殺したのか」という尋問から始まる。ルキーニは「皇妃本人が望んだのだ」と言い、動機は「偉大な愛だ」と答え、それを証明するためにエリザベート本人と同じ時代を生きたちを召喚して彼女の物語を語らせるという構成で進行していく。

しかし、実際のルキーニの言葉や、その人生については、これまであまり知られてこなかった。ルキーニは現実の裁判では何と証言し、どのような言葉を遺したのか。

ルキーニ自身の手で書かれたものは『ルキーニ回顧録』のほかにも「無政府主義の賛歌集」と呼ばれる手帳や年鑑に書き込まれた獄中日記、手紙類があるが、回顧録が最も重要である。ルキーニの生い立ちから孤児院での暮らし、そして里親との関係などが綴られているだけではなく、どのような考

え方をしていたかがうかがい知れるからである。

ここでは回顧録の読解に役立つ事前知識としてルキーニの半生を紹介する。さまざまな記録や資料を参考にしてまとめてあるので、ルキーニ本人の記述と食い違っている場合があることに注意してほしい。

パリ市立古文書館に保管されている一八七三年五月一日付の公文書によると、ルキーニは一八七三年四月二二日にパリ一二区にあるサン・タントワーヌ救済院で生まれた。公文書では *Lucrenzi* という綴りが削除され、*Lucrenzi* に訂正されている。ルキーニという姓は母親の姓である。ほかに *Lachini*、*Lacchini*、*Lucchini* といった綴りがある。当時、そうした綴りのばらつきは珍しいことではなかった。

ルキーニを産んだ時、母親は二六歳であった。母親の名前もルキーニと同じく *Louise Lucrenzi*、もしくは *Louise Lucchini*、*Luigia Lacchini* といったばらつきがある。本書ではルイーズと呼ぶことにする。ルイーズは出産の半年くらい前に仕事を求めてパリにやって来たという。父親と一緒にいなかったうえ、ルイーズにも仕事が見つからなかった。結局、ルキーニは四五二二九番の捨て子として登録されることになった。それからルキーニはフランス中部にあるランテネという町に住む里親のもとに移された。そして、一八七四年九月三〇日までランテネで養育された。

幼いルキーニの運命を変えたのはフランス当局の決定である。フランス当局はルイーズが妊娠を隠して子供を捨てるためにイタリアからパリに出たと判断し、ルキーニをイタリアに送還することにした。フランス当局の要請に応じたイタリア当局はルイーズの出身地であるパルマ県の孤児院にルキー

ニを受け入れることにした。一八七四年一〇月三日午後三時五分、ルキーニを乗せた汽車はパリを發つて南に向かった。翌日、汽車はフレッジス鉄道トンネルを抜けてイタリアに入った。こうしてルキーニは子供時代をイタリア北部のパルマで過ごすことになった。

一〇月七日、ルキーニはパルマにある孤児院に收容された。孤児院の正式名称はオスピツイオ・デグリ・エスポステイである。それから八日後、孤児院はルキーニをパルマ市内に住むモニチ夫妻に託した。その後、ルキーニはモニチ夫妻の家でしばらく暮らした。ルキーニの記述からすると、モニチ家での暮らしは豊かではないが楽しいものであったようだ。

一八八一年四月二日、ルキーニはモニチ夫妻によつて別の孤児院に預けられた。その孤児院の正式名称はオスピツイオ・デル・アルテイであり、ルキーニがパリから到着した時に最初に預けられた孤児院とは異なる。孤児院での生活は凍傷で一カ月入院した期間を除くと約一〇カ月に及んだ。その翌年の三月二日にルキーニはニカシ家に引き取られてパルマの南西にあるヴァラーノ・デ・メレガリーという村に移った。ニカシ家での生活はルキーニの子供時代において最も悲惨な記憶だったようだ。一四歳を目前に控えたルキーニが里親のもとを出奔するところで回顧録は終わっている。それはルキーニの子供時代の終わりであった。

ルキーニが獄中で不審死を遂げたせいで回顧録は未完に終わった。そこで訳者が回顧録に続くルキーニの青年時代の物語と暗殺の経緯、予審と裁判、そして獄中生活からその最期に至るまでを補った。ルキーニの後半生をまとめるにあたって、回顧録を編纂した古文書学者サント・カッポンの記述のほか、回顧録のイタリア語訳を出版したコラッド・トルフェッリの解説、マリーア・マトレイとアンス

ヴァルト・クリューガーによって公開されたジュネーヴ当局の記録、当時の新聞報道などを参照した。特にジュネーヴ当局の記録はルキーニが犯行について直接語った重要な記録である。

回顧録に話を戻そう。回顧録は「読者へ」と題する部分から始まっていることから刊行を前提に書かれていることがわかる。読者に訴えかけるように書かれている部分があるかと思えば、母親に呼びかけるように書かれている部分があったり、自分のことを「私」と一人称で表現した部分があるかと思えば、「彼」と三人称で表現した部分があったりするなど技巧を凝らそうと苦心した様子が見える。

回顧録はフランス語で書かれている。ただ、ところどころにイタリア語や英語の語彙が含まれている。そもそもフランス語はルキーニの母語ではない。上述のようにルキーニはフランス生まれであるが、幼少期の大半をイタリアで過ごしているので話したり書いたりする時に使っていた言語は主にイタリア語である。フランス語で書くことを学んだのは監獄に入ってからである。ルキーニは、一九〇〇年一月七日付の手紙に「これは私が初めて書いたフランス語だ」と記している。ルキーニによれば、学校でフランス語を学んだことはなく読書を通じてフランス語を学んだという。

回顧録を編集したカッポンは『ル・タン紙』（一九九八年九月五日付）の取材に答えて以下のように述べている。

ルキーニは自分が何者であり、どこから来たのかを世間に説明しなかった。しかし、それは簡単なことではなかった。なぜなら監獄に入った時、彼はフランス語を話すのが下手だったからだ。

彼の最初の望みは自分の記憶をうまく綴れるようにフランス語をしつかり身につけることであつた。

なぜ母語ではないフランス語で回顧録を書こうとしたのか。イタリア語よりも国際的な言語であるフランス語で書いたほうがより多くの人びとの目に触れる可能性が高かったからだと考えられる。きっとルキーニは回顧録が世間の評判になることを期待していたのだろう。

回顧録ではルキーニの暮らしだけではなく、社会福祉や宗教観などに関するルキーニ独自の思想も余すところなく展開されている。ルキーニの記述は、一九世紀後半のイタリアにおいて社会からほとんど注目されることのなかった恵まれない人びとの暮らしに光を当てる貴重な証言である。また孤児院の制度的欠陥に関する指摘はルキーニが鋭い洞察力を持つていたことを示している。

またルキーニが綴った文章を読むと、多くの書籍に影響を受けたことが推察できる。実際、ルキーニは獄中で多くの書籍に親しんでいた。回顧録にはヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』やジャン・ジャック・ルソーの『告白』を想起させる内容が含まれている。カッポンは上述の取材において「ルキーニは『レ・ミゼラブル』や『家なき子』を読んでいたが、現実を粉飾していると非難している。声を上げる勇氣を持たないあらゆる見捨てられた子供たちのために自分が証人になりたいと考えていた」と述べている。

ルキーニは回顧録を刊行することで何を世に問おうとしたのか。一見すると、ルキーニは暗殺事件を起こした要因を社会的不平等に帰すことで罪を免れようとしているように思える。それは半分正し

いが、半分誤っている。なぜならルキーニは暗殺事件を起こした要因を社会的不平等に帰しているものの、自ら死刑を望んだことからわかるように罪を認めているからである。

ルキーニが死刑を望んだ理由は定かではない。おそらくヘイマーケット事件から影響を受けたと考えられる。一八八六年五月に起きたヘイマーケット事件は八時間労働制を求めて集会を開いた労働者たちが警察と衝突した事件である。労働者が逮捕され、死刑宣告を受けた。死刑執行を受けた者たちは「無政府主義、万歳」と叫んだという。そうした逸話は広く伝えられ、彼らは英雄として祭り上げられた。ルキーニには一種の英雄願望があったのかもしれない。

いずれにせよ、回顧録は処罰を免れる方便として書かれたものではない。ではルキーニは回顧録を何のために書いたのか。「犯罪学の父」と呼ばれるチューザレ・ロンブローゾが発表したルキーニに関する論文が回顧録の執筆に大きな影響を与えたようである。それはルキーニが暗殺事件を起こした原因を先天的な要素に求める論文であった。

ロンブローゾは犯罪学に科学的方法を導入し、生得的に犯罪者の性質を持つ者が存在するという生得的犯罪者説を主張したイタリアの精神科医である。ルキーニに関する所見を述べた論文のほかには「ヘイマーケット事件で逮捕された無政府主義者に関する分析で知られている。ロンブローゾは無政府主義者に生得的な犯罪者の特質があると断定した。

ルキーニはそうしたロンブローゾの生得的犯罪者説に強く反発し、自らの経験を綴ることによって社会的不平等が暗殺事件の要因であると訴えた。獄中での面談でルキーニは「私はロンブローゾの生得的犯罪者説に抗議する。もしそれが真実であれば、私は一八九八年九月一〇日に暗殺のために待ち

伏せすることはなかっただろう」と断言している。つまり、ルキーニにとって暗殺は恵まれない人びとによる特権階級に対する復讐であり、特権階級に悔^{かい}悛^{しん}を促すための警告であつた。生得的犯罪者を認めてしまえば、ルキーニにとって暗殺の意義が失われてしまう。だからこそルキーニは生得的犯罪者説に強く反駁^{はんぱく}した。

また回顧録はルキーニに思わぬ効果をもたらした。カッポンによれば、回顧録で自己の苦悩を語り、その原因となつた事実^{じじつ}に直面することによつてルキーニに精神の浄化がもたらされたという。投獄された当初、ルキーニは自分を捨てた母親を恨んでいたが、多くの読書や回顧録の執筆を通じて母親もまた自分と同じく社会的不正の犠牲者であつたと認識を改めた。まさにキリストがその身を捧げて全人類の罪を贖^{あがな}つたように、エリザベートの流した血は恨みを忘れて愛することを知る機会をルキーニに与えることで大いなる救済をもたらした。それは不幸な子供たちの耐え難い運命に関心を持つていたエリザベートにとつて幽世^{かくよ}の慰めとなるのではないか。

回顧録が世に出た経緯について少し触れておきたい。回顧録は長らくその存在自体が知られていなかった。一九三八年にカッポンの父親が元看守の娘から買い取つたものだという。ルキーニが監獄で死去した後、元看守は五冊の青い表紙の手帳をずっと保管していた。元看守が一九三七年に亡くなつたため、遺品整理の一環として手帳が売りに出された。サント・カッポンの父親の手に渡つた手帳はそのまま死蔵された。一九六三年、年老いた父親の文書を整理する中でサント・カッポンは手帳を発見した。サント・カッポンの手によつて手帳に綴られたルキーニの文章が編纂され、暗殺事件が起きるからちようど一〇〇年後の一九九八年に『シシイの暗殺者の回顧録』として刊行された。本書は

『シシイの暗殺者の回顧録』を底本としている。解説の締めくくりとして、カッポンが回顧録の出版に際して『ル・タン紙』（同上）の取材で述べた言葉を紹介しておこう。

エリザベートとルキーニは二人とも誤解されていた。たとえ誤解されても自分で何か書いておけば物事をはっきりさせられる。だからルキーニは手帳「に回顧録」を書き、オーストリア皇妃エリザベートは多くの詩を残した。「中略」。死後も残る真実によってルキーニもエリザベートも自分たちが何者であるか示した。このようにまったく異なる境遇の二人に何か繋がりを見いだすことは難しいが、彼らにはそのような共通点もあった。「中略」。今日、シシイの歴史的な側面よりも神話的な側面が強調されている。しかし、もし悲劇的な結末がなければ、彼女は神話的存在になり得ただろうか。「暗殺事件から」一〇〇周年を迎えた今、ルキーニに歴史上の正しい位置を与える機会である。まずルキーニ自身についてあらゆることを学ぼう。彼が何者であったか知るために。そして、エリザベートとどのような関係にあったか知るために。いつしか犠牲者と暗殺者は切り離せない「運命の」絆を結ぶことになるだろう。

注記

※ルキーニという名前はルケーニ、もしくはルツケーニというカタカナ表記のほうがより正確だが、一般に馴染み深いルキーニを採用した。またエリザベートもエリーザベトというカタカナ表記のほうがより正確だが、同じく一般に馴染み深いエリザベートを採用した。

※できる限り原文に忠実な翻訳となるように努めつつ、同時に読み物として楽しめる訳文となるように配慮した。訳文の読解が困難な箇所があるが、それは翻訳の問題ではなく原文の性質に由来する。

※ルキーニによって書かれた回顧録の原文の中にはPERSONといったようにすべて大文字で強調されている部分やDieといったように太字で強調されている部分がある。おそらくルキーニはそうした部分に特別な意味を込めているようである。そうした部分をすべて訳注で指摘すると煩雑になるので**牢獄**や**父親**といった太字で示す。また原文が斜字体で書かれている部分は同じく斜字体で示す。

※回顧録の章立てや区切りは底本の『シシイの暗殺者の回顧録』に準拠している。

※本文中の（ ）は原文で補われている言葉であり、「」は訳者が補った言葉である。

※anarchisme (アナーキズム) にはさまざまな考え方が含まれ、「無政府主義」という訳語は必ずしも正確とは言えない。ただ「無政府主義」という訳語が定着しているのでそのまま使用する。

※特定の人種や民族、職業、身体的特徴に関するさまざまな侮蔑的表現や誤謬ごごうは訳者の認識によるものではなく、あくまで原著者の認識によるものである。できる限り原文を尊重しつつ、現代の基準から適切ではないと判断した訳語を一部改めていることに注意してほしい。差別や偏見の助長は訳者が決して望まないことである。

(Réduction photographique 1/7.)

第1章

ルキ一ニ回顧録



Inclina

Racine (cavité)

Haut

Des... Base

oite

読者へ

ここで私は我が人生の話を君に提供する。読んでみるとあまりに奇抜な内容なので、君は私が嘘しか書いていないときっと思うだろう。

しかしながら、私は君に間違いを認めさせようと望んでいるわけではない。それは私にとって心苦しいことだ。

いずれにせよ、私は神に感謝を捧げるように君に忠告したい。なぜなら、君が私のことを間違っていると判断できるのは神から恩恵を授かっているからだ。その一方、私は神から完全に見放されていた。

回顧録を書く目的は何かと君が私に問いかけたら、多くの目的があると私は答えるだろう。ただそうした多くの目的の中に君が想像するような目的、すなわち君に慈悲を求めるといふ目的があるはずだと思つて探してみても無駄である。君は何も見つけられないだろう。君が私の言葉で驚いたのであれば、この真実の物語を読むことでそうした驚きが緩和されるはずだと予告しておきたい。

読み終わった後でも君はまだ態度を変えずにいられるだろうか。私はそうではないと思つている。君に納得してもらえないことを切望しているからだ。君が忘れていたなら（不幸な者たちはすぐに忘れ

去られてしまう）、私は君に思い出させよう。思想を持つことがあらゆる者に分け隔てなく許される世界に今、私が生きていることを。そして、この地球上では誰もがわざわざ鎧戸に囲まれなくても思想家になれる（ならざるを得ない……）ことを「トルフェリによれば、たとえ牢獄にいようと思想家になれるといった意味」。デイオゲネスに……^な倣う者「数々の奇行で知られる古代ギリシアの哲学者。それに倣う者は品格のない者を指している」を増やし続けていることを君の世界が誇りに思っているのであれば、品格こそ君の世界で絶対に必要とされるものだと君は悟るはずだ。もし私がこのような思慮による果実を収穫できていたらどうか。そのとおりであれば、剝奪——君は私から陽光を奪った——と引き換えに、私は君に負った借りをすでに十分に返したはずだと感じている「収監後に更生したルキ——二は暗殺という「借り」を自由の剝奪によって十分に返せたはずだと主張している」。

君の心が平穩に保たれんことを。それが私の真摯な願いである。また私はかつて自分が味わった苦惱と同じくらい大きな幸福が君に訪れることを願う。そうした苦惱には君から受けた軽蔑——君はかつて軽蔑でもって私のささやかな誠意を踏みにじった——も含まれている。

君が神に不満を訴えるのは筋違いだろう。

どのような理由で私が回顧録の執筆をする気になったのか君は知りたيدらうか。では最も重要な理由を三つ挙げよう。

一、社会的不正の犠牲者たちに強い関心を抱いているように見える知識人たちは、奈落の底に落ちた犠牲者たちを見ると、同情を示すために、犠牲者たちが狭く長い道を進むのをやめるように仕向けている——それは終わりのない道である。

もしそうした同情が真摯なものであれば、犠牲者たちが大きな表通りを歩けるようにしてほしい。実際のところ、彼らが富を増やせるような近道はない（それなりの富があれば打たれても倒れずにすむ……それが彼らの考え方である）。しかし、彼らはそうした浅はかな目論見もくろみを放棄することを余儀なくされるだろう。たとえ彼らが自然の摂理を乱していなくても、自然の摂理が彼らを拒絶するからだ。

立法者たちが刑法典に道徳律を課した日から始まる人道主義による貢献——その考え方によって不幸な者たちに借りが返されている——を私は見過ごしているわけではない。とはいえ、正直なところ、私は不公正のせいで私と同じような道を歩むことになる者を憐れあはんだり、そのような者が榮譽を得られることを望んだりしているわけではない。というのも、「人道主義という」考え方が神聖なものとされると、真の正義の女神のために用意された台座を亡霊「厄介者」や「邪魔者」といった意味が塞いでしまうことになるからである。弱者が待ち望む唯一の女神……「ルキーニは人道主義に一定の理解を示しながらも、人道主義によって誰でも救済されるようになれば、真の正義の女神による救済を本当に受けるべき者の機会が奪われてしまうのではないかと危惧しているのだろう」。大学の課程で学んでいないこと（明らかに私の落ち度ではない）を根拠にして私の見解を馬鹿げていると主張する者たちがいるなら、私はそうした賢明な者たちに答えよう。当該の問題を論じるために私は自分自身についてよく理解しているうえに優れた能力を持っていると。私の能力はロンブローゾなる者が持つあらゆる能力を凌駕りゅうがしている……「ロンブローゾはルキーニが犯罪者になったのは生得的な性質によるところが大きいと指摘している。ルキーニはロンブローゾの生得的犯罪者説を否定し、社会的不公正の犠牲者が犯罪者になる

と訴えている」。

この回顧録——人為的な……犯罪者「生得的な性質による犯罪者に対して人為的、すなわち環境的な要因による犯罪者」による自叙伝——を読んで人間の性質がどのように変化したのか本當に知りたければ、私は君たち犯罪学者を全員招待する。

二、社会的進歩を謳う者たち（社会的進歩は彼らにだけ恩恵をもたらすと私は考えている）は豎琴を爪弾くことよりも、神がすべての創造物に授けた貴重な贈り物——愛撫、微笑み、母の抱擁——を生まれた日から奪われている——文明的であることを誇りながらも無思慮な法律を制定している社会のせいである——見捨てられた子供たちにもつと関心を抱くべきである。たとえ子供たちが生き延びることができて、強者は自分たちの戦利品が奪われそうになれば「社会的不正の」犠牲者を威圧するために法典の峻厳さを見せつける必要がある。法典は暴力をむさぼる強者によって作られたからだ。さらに強者は子供たちを唆す術を心得ているばかりか、子供たちをどうすれば墮落させられるか知っている、棘が刺さっても子供たちは傷に気づかないと確信している。それはまったく驚くべきことではない。

三、数カ月にわたって新たに熱中できることが私の頭脳に与えられた。もちろんこれまでも熱中できることは十分にあった。笑いに次ぐ笑いのせいで私は毎日四時間も自分の腹を抱えなければならなかった。そのような笑いはどうして引き起こされたのか。君の世界にいる住民たちに関して私が思っていたことのせいだ。ああ、読者よ、彼らは**食い扶持**にありつくためにとんぼ返りを打っている

……。

ところで君に知ってほしいのだが、私は祝福された階層が彼らの神に感謝していないのに驚いている。悪人の神のように神殿——金の神殿——で祀るべきである。私は祝福された階層に神がおわしませぬのを忘れていた……。この神はいつたい何者なのか。その者は花の都に住む人間である。

悲運の王妃を暗殺した者がお偉方の主張するような愚者ではないことを司法精神科医たちのような洞察力を持たない読者に納得してもらいたいと願って私は自分の人生について書いてみようと思った。愚者たちはほとんど空を見上げずに暮らしている。愚者たちの視界は多くの雲 [NUNAGES、上流階級が持つ権威や財力などに言及している] によって遮られて^{さへ}いるからだ。上層に住む者たちは雲で身を包む術をよく知っている。それは健全な状態を維持するために絶対に必要な予防策だと私は思う。というのも、上層の環境は……穏やかな時でさえ……とても危険だからだ。

虚栄心で罪を犯したと私は非難されている。それは稚拙な洞察である。たとえ虚栄心を抱いていたとしても、私は自分の境遇以上の働きを示すことで虚栄心を満たしただろう。そもそも虚栄心は上層の人びとによってのみ評価されるものだからである。

したがって、虚栄心が「犯行の」動機だという考え方に固執する者がもしいるなら、社会に責任があることも認めなければならない。もし社会が私を放置していなければ、私の高慢な本性を見抜いて矯正する機会があつたはずだ。私に白い修了証書を取得する手段を与えなかつた社会は、私がほかの場所で赤い「赤は無政府主義、社会主義、社会主義、共産主義などに通じる色」修了証書を自由に取得するのを妨げることができない。

通用するならどのような修了証書でもまったく中身は同じだと言えるかもしれない。見分けられる

のは表装の色の違いだけである。数世代も経てば色はかつて帯びていた名譽を取り戻すだろう。今日のおどてもの大立者たちが彼らの広大な土地——虚栄を競うために必要な手段——を所有できているのは先祖が罪を犯したおかげではなかるうか。

ああ、新聞記者たちよ、あなた方は職業病のせいで犯罪が起きた理由を探り出すのではなく理由を犯罪に当てはめている。もしあなた方が真実を伝えなければ——暗殺犯は黄色の革の手袋をはめている「資本家に操作されている労働組合、いわゆる御用組合に属している労働者を指す」とあなた方が伝えた時のように——、罰として発行部数が減少して莫大な部数を印刷できなくなってしまうだろう。いづれにせよ、この回顧録が神殿に放火する者「社会秩序を崩壊させる者といった意味」の精神やスパルタクス「古代ローマに対する反乱を引き起こした奴隷の剣闘士」の精神をもつて書かれていることが十分に示されれば、回顧録の著者はあなた方の印刷機をさらに回転させる結果を生み出すだろう。

読者よ、君が学者たちの想像によって生み出された情景（悲しい真実と比べればお粗末な代物だ）を劇場で見せられているだけだと私は気づいている。君は涙を流すはずだ。そして、そのせいで君の貯水槽はずっと涸れてしまうだろう。それでも私の幸福な幼少期が暗転するのを読めば、きつと君はまた涙を雨のように流すだろう。たとえ私の予想が的中しても、「涙の」嵐の後に繊細な肌に残された乱れを整えるために君はサン・ゴバン「鏡の製造会社の名称、転じて鏡のこと」をのぞこうと駆け出さないでほしい。すぐに救いを君に送るので待つてほしい。続けて読んでくれれば、君の別の貯水槽から笑いが噴き出すはずだ「トルフェッリによれば、この部分は富裕層の豪華な浴室と対比させることでルキーニの牢獄の惨状を際立たせる比喩」。

さて繊細な肌について言及したところで（君が優れていることを鼻にかけないほど謙虚であることを私は祈りたい）、私は「運命の」車輪の中心に置かれている」（パスカル）現代のゴリアテたち「旧約聖書に登場する巨人、転じて並外れて強力な存在」をちょうど思い出した……「パスカルの言葉を引用したと考えられるが、完全に一致する言葉は見つからない。ただ『パンセ』の中に「大貴族にも庶民にも同じ波乱、同じ心労、同じ情熱が生じる。しかし一方は車輪の上部にいるが、他方は中心付近にいる。こうして同じ運動によっても揺さぶられ方が小さい（塩川徹也訳）」という文章がある。この文章をルキーニは「車輪の中心」、すなわち社会の中央に置かれている上流階級（現代のゴリアテたち）は運命の変転を受けても影響が小さいと解釈している」。

巨人たちが私の話とどのような関係があるのか。深い関係がある。私が回顧録を捧げたいのはその巨人たちである。ただ誤った教育（彼らを現実から引き離しているばかりか、無益な奢侈しゃしに耽ふけることと同僚である人類に甚大な悪影響を与えていることを彼らに自覚させない教育）を受けた巨人たちに情状酌量を公正に認めるべきだろう。この回顧録を読むことで巨人たちは、人間性の侵害という罪が大多数の者たちにとって非常に有害だと納得できるはずだ。求めさえすれば压制への扉が開かれ新しい圧制が確立されることを伝えずに、開けゴマ「文字や知識のみを純粹に教えることを意味している」とだけ伝える本で狼の子供たち「本能しかない自然状態の子供たちのこと、もしくは将来、巨人になり得る子供たちのこと」を教育しなければならない。以上の理由でこれから私が述べることの重要性がより増すだろう。

読者よ、君は自分が運命決定論者だと宣言することにためらいを感じつつも運命決定論を信じてい

るなどとまだ言っているのだろうか。幸いにも君が十分な時間を取って私の回顧録を丹念に読んでくれば、きつと疑念は晴れ、君の信念は揺るぎないものになるだろう。「ルキーニは運命決定論者ではない。運命決定論に疑念を感じている読者が回顧録を読めば運命決定論をはっきり否定できるように」とルキーニは考えていた。

つまらないことで私の人生の進路が変えられたと思えるような機会が多くあったものの、千里眼を持つと言われる者たちを信じられないのと同じく、そのような目に見えない力の存在を私はとうてい信じられない。

私は君が公平な判断を下せる者だと信じている。君は私が率直に物事を述べていると納得してくれらるだろう。読者よ、私は君の手を拝借したい。いったい何か。すなわち、君の手帳から一頁を割き、私の犯罪に何点を割り振るか——たとえば一〇〇点——少し考えて借方かかたの欄に書いてみてほしい。「まず犯罪を社会に対する借方に計上したうえで、貧困や家庭環境など本人の責任ではないことを社会に対する貸方に計上して比較するようにルキーニは求めている」。

それが終わったら、回顧録を読みながらあらゆる点数——私の不運、私の欠点、そして私の優れた性質の点数——を付けて「借方と貸方」かかたそれぞれの欄に書き留めてほしい。言うまでもないことかもしれないが、君は私の思想「の優劣」の程度で処罰を下してはならない。というのも、思想「の優劣」の程度で「人間を」推し量れる「絶対的な」基準など存在しないからである。そうである以上、君は自分の資産の程度を基準にして「人間を」推し量っている。それなりの資産があるのか「と君は知ろうとする」。君はなかなかの暮らしぶりだと気づくだろう。まずまずの暮らしぶりなのか「と君は知る

うとする」。君はまずまずの暮らしぶりだと気づくだろう。替えのシャツを持っていないのか「と君は知ろうとする」。その場合、君はシャツがくたびれていると気づくだろう。

最後に点数を総計すると、「借方と貸方の」総計にそれほど差がないと君は気づくはずだ。——それは社会が私の共犯であることを意味するので、君が思っているよりも私の罪は軽い。したがって、君は私に同情を示してもよいだろう。路上を自由に放浪している不幸な子供たちに君が出会った時に示すような同情を私に示してほしい。

不幸な子供たちに声をかけてほしい。そして、君自身の子供たちに与えるような言葉を不幸な子供たち——君の子供たちの本当のきょうだいであるかのように——にもかけてほしい。もしかすると本当に……君の子供もいるかもしれない。

言葉をかけるだけで十分に不幸が軽減されるので、後にその子供が無害「な存在」になることもあると君はわかっているのだろうか。

住処すまかがない年老いた人びとのことも忘れてはならない。彼らに住処がないのは君が少し広すぎる邸宅を建てたいと望んだからだ。

君はこの回顧録の対価を私に与えるよりもそのような行動「社会的弱者を救済したり思いやりを示したりする行動のこと」を取ってほしい。私は回顧録を君に無償で提供している。ただ歓喜の震えを我が同胞の高潔な死者の霊のもとに送るために。

署名…ルイジ・ルキーニ

高潔な世界主義者

「エヴェシエはルキーニが収監されていたジュネーヴの監獄である。また臆病なナザレ派とは迫害を受けながらもキリスト教を広めたナザレ派に自らをなぞらえた表現である」

皇妃エリザベートの暗殺者

ルイジ・ルキーニ回顧録

ルイジ・ルキーニ 著／西川秀和 翻訳・解説

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：2,200円（10%税込）

発売日：2024年5月24日

ISBN：978-4-7976-7448-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)